

■第3回『高梁川水系小田川堤防調査委員会』

開催日時：平成30年8月10日（金）10:00～12:30

開催場所：国土交通省 中国地方整備局 岡山河川事務所 別棟2階 会議室

資料：議事次第、配付資料一覧、席次表、資料1-1、資料2-1、資料2-2

1. 委員会の議事概要

➤事務局より、前回委員会で委員から助言や指摘のあった事項について、説明・報告を行った。

具体的には、

- ①真備町内で浸水した箇所の浸水深を現地で調査した結果の報告を行った。
- ②河川内の洪水痕跡について、宅地側の痕跡を含めた詳細な現地追加調査の結果の報告を行った。
- ③今回の洪水による真備町内の浸水範囲や浸水深について、①及び②の調査結果等をもとに再現計算を実施した結果の報告を行った。

➤堤防の被災要因について、決壊箇所ごとに考えられる複数の要因について、事務局の分析結果（案）を提示し、意見交換を行った。

2. 堤防の決壊要因の分析結果

これまでの委員会による現地調査や前回の委員会での議論を踏まえ、委員会としての現時点での見解は、以下のとおりと推定した。

①小田川 左岸 3k400 の決壊箇所（国管理）

小田川の堤防高が前後区間と比較して、相対的に低いと推定される高馬川合流点付近や、高馬川の堤防の低い箇所から小田川の水が越水したことで、堤防の宅地側の斜面が削り取られ、時間の経過とともに堤防の断面が薄くなり、川側からの水圧に耐えきれず決壊したことが、主たる原因だと推定される。

また、今回の洪水では小田川は長時間にわたり計画高水位を超過しており、川側から河川水が堤防に染みこむ「浸透現象」や、内水による氾濫も発生していたと推定されることから、堤体内に多くの水がたまり、堤防が弱体化した可能性もある。

決壊の主たる原因は越水であるが、複数の要因が絡み合って決壊したと推定される。

②小田川 左岸 6k400 の決壊箇所（国管理）

3k400 の決壊箇所と基本的な要因は同様で、小田川の堤防高が前後区間と比較して、相対的に低い箇所から小田川の水が越水したことで、堤防の宅地側の斜面が削り取られ、時間の経過とともに堤防の断面が薄くなり、川側からの水圧に耐えきれず決壊

したことが、主たる原因だと推定される。

また、今回の洪水では小田川は長時間にわたり計画高水位を超過しており、川側から河川水が堤防に染みこむ「浸透現象」や、橋梁部からの溢水が湛水していたと推定されることから、堤体内に多くの水がたまり、堤防が弱体化した可能性もある。

決壊の主たる原因は越水であるが、複数の要因が絡み合っただけで決壊したと推定される。

③末政川の決壊箇所（岡山県管理）

左岸 0k400 については、小田川からの背水影響により橋梁部分の堤防が低い箇所です。溢水したと推定される。

この箇所から宅地側へ水が回り堤防裏側の盛土を侵食し、時間の経過とともに堤防の断面が薄くなり、川側からの水圧に耐えきれず決壊したことが、主たる原因だと推定される。

0k700 の両岸については、上下流に比べて堤防が低くなっている区間となっており、右岸（西側）の堤防が左岸（東側）の堤防より低かったと推定される。

現地では橋も流されており、橋梁による何らかの影響があった可能性もある。小田川からの背水影響により末政川の水位が上昇し、越水したことで、堤防の宅地側の斜面が削り取られ、時間の経過とともに堤防の断面が薄くなり、川側からの水圧に耐えきれず決壊したことが、主たる原因だと推定される。

④高馬川の決壊箇所（岡山県管理）

小田川の背水の影響により、高馬川の水位が上昇し、高馬川の堤防の低い箇所から越水したことで、堤防の宅地側の斜面が削り取られ、時間の経過とともに堤防の断面が薄くなり、川側からの水圧に耐えきれず決壊したことが、主たる原因だと推定される。

⑤真谷川の決壊箇所（岡山県管理）

左岸 0k500 については、小田川の背水の影響を受けて真谷川の水位が上昇し、真谷川の堤防の低い箇所から越水したことで、堤防の宅地側の斜面が削り取られ、時間の経過とともに堤防の断面が薄くなり、川側からの水圧に耐えきれず決壊したことが、主たる原因だと推定される。

委員会としては「浸透」による堤防決壊の可能性については、より詳細な分析が必要であると判断した。

現時点で、複数の要因の一つである可能性はあるものの、決壊の原因であるとの特定はできていない。

次回以降、今回の委員会からの助言等を踏まえ、より詳細な被災要因の分析を行い、堤防の決壊要因を特定し、必要な対策を検討したうえで、事務局が提案する具体的な対策工法について助言を行うことを確認した。